

要旨

研究背景

生理的浮腫(圧痕)は妊婦の 30-80%に認められるが、28 週以前に出現した圧痕のみが「病的浮腫」として医療の対象となっている。しかし不快症状としてのむくみ感までを含んだ浮腫については明らかにされていない。

目的

本研究は妊婦が不快な自覚症状としてとらえられた浮腫(圧痕、むくみ感)の出現状況と日常生活行動を明らかにすることを目的とする。

研究方法

本研究は助産所に通院中の正常な妊娠経過をたどる妊婦 20 名の浮腫の出現状況と日常生活行動の実態を明らかにしたケースシリーズ研究である。本研究においては、浮腫を従来の「圧痕」のみでなく「むくみ感」を含めたものとして定義した。

医療記録から対象者の基礎情報や圧痕の程度を収集し、インタビューでは①浮腫の発生状況、②浮腫の関連症状、③不快症状、④日常生活行動について半構成的面接法を行った。分析方法は、浮腫(圧痕)むくみ感と日常生活行動に関するデータを抽出し、それをケース毎に記述した。また、共通してみられた症状、日常生活行動を分類し、症状の出方と日常生活行動の関係性をいくつかのパターンに分類して比較検討した。本研究は聖路加看護大学倫理審査委員会の審査・承諾を得た。(承認番号 11-054)

結果

対象者 20 名のうち、むくみ感や圧痕のいずれかが認められたのは 16 名(80%)、いずれも見られないものは 4 名(20%)であった。むくみ感は 14 名(70%)に認められ、そのうちの約半数の 6 名には圧痕がみられた。また、圧痕は 8 名(40%)に認められた。

圧痕やむくみ感がみられた 16 名は、その出現時期や程度は多様であった。圧痕とむくみ感の出現順序では、圧痕よりもむくみ感がすべての妊婦において先行していた。むくみ感の出現後圧痕に至ったもの 14 名中 6 名と約半数であった。圧痕、むくみ感を「不快である」とするものは 16 名中 9 名であり、圧痕まで至った 6 名全員がむくみ感を不快と感じていた。

日常生活行動の変容について、対象者 20 名中、今回妊娠して生活行動を変えたもの 12 名、第一子誕生とともに変えたもの 4 名、変えていないもの 4 名であった。半数以上のものが、今回の妊娠を機に日常生活行動を変えていた。生活行動内容について、食事では、「野菜や和食中心」、「身体を冷やさない食事」、運動では、「スイミング」「ウォーキング」、「スクワット」、入浴は、「夏も湯船に入る」、睡眠、休息に関して「休息をとる」、「早めに寝る」というデータが得られた。服装に関しては、「ゆるめの服」、「夏でも靴下をはく」、が挙げ

られた。むくみ感の出現によって日常生活行動を変えたものは14名中2名で、内容は「塩分を控える」、「飲み物をホットにする」、「湯船に入る」、「五本指ソックスにする」であった。日常生活行動では、圧痕やむくみ感がとみにないものの生活では、「野菜中心」、「湯船につかる」、「冷えを予防する」、という日常生活行動の傾向がみられた。

結論

対象者20名のうち、むくみ感や圧痕のいずれかが認められたのは16名(80%)、いずれも見られないものは4名(20%)であった。むくみ感は14名(70%)に認められ、そのうちの約半数の6名には圧痕がみられた。また、圧痕は8名(40%)に認められた。

圧痕やむくみ感がみられた16名は、その出現時期や強さはすべて多様であった。日常生活行動は、上の子どもの育児や今回の妊娠を機に生活行動を変容させていた。